

千葉県佐倉市における都市化の進展に伴う農業の変容

高木直子

本論文の目的は、純農村的な地域が人口増加、宅地化という都市化のインパクトをうけた時、地域農業がどのように変容していくのかを把握し、かつその変容の地域的差異を明らかにすることである。又、その変容がはたして地域農業を近郊農業へ向かわしめるか、をも含め考察を行なった。

対象地域としては、近年になり人口増加を著しくする千葉県佐倉市を選択した。

佐倉市は下総台地に位置し、房総最大の佐倉藩の城下町として歴史的には繁栄を誇る地域であるが、明治以降その停滞ぶりは著しかった。それが高度成長の波の中で、昭和40年を境に京成線沿線より東京への通勤圏の拡大とともに人口増加をみる。又、工業団地の造成により産業の育成もはかられているが、双方ともに現在は途上の段階にあると言える。

この地域の従来の農業は、台地に細長く刻まれた谷津田における稲作を中心に、雑穀・いも類を作付ける自給的なもので、生産性の低さを特色としていた。

現在、市全体としては、生産基盤の中では労働力の流出が特出しており、専従就業者は他地域に比べ少ないことを指摘できる。その労働力の不足は作業の省力化をもたらし、稲・落花生を中心とする粗放的经营たらしめている。大規模畜産、施設園芸、野菜作も地域農業として性格づけるには至らず、依然として生産性は停滞している。

市域内部については、宅地化による耕地の壊廃は畑地中心で、そのため水田地帯となる地域は、労働力の流出が顕著で全体的な農家の崩壊を見せ粗放的经营が卓越する。同様に宅地化が進展しながらも畑地を残す地域では、大部分は前者と類似するが、一部は近郊農業化への動きを見せ農業維持の傾向がある。これらの地域から地域的に幅を

持ちながら外に向うに従い、生産基盤の崩壊度は薄れ近郊農業に向う農家は相対的に増加し、その農家を中心に地域農業は維持される。

市域内部の分析からも、都市化の影響で労働力の流出が先行した為、残存労働力の老齢化に伴い粗放的经营が卓越し、生産性の停滞という状況をもたらされたことが確認される。これは従来の農業の性格、地形・土壌等自然条件、他産業就業機会に恵まれる位置にあること、住民の気質を含め地域的な風土に起因する（これらは地域により適合の程度は異なるが、それらが総合的に作用した結果、現在の農業地域を決定する）。

しかしそれは一時的なもので、都市化が進展しその影響が浸透する過程が粗放的经营を営む脆弱な農家が離農に向い、逆に農業を存続する農家には施設の導入、畜産の大規模化、野菜部門への転換と、高い生産性を求める動きが認められ徐々に近郊農業化していると思われる。

今後は更に都市化され、その影響も強くなることが予想されるが、農業はその状況にたえうる形をとると思われる。即ち、後継者は不足し農業離れは顕著になるが、後継者を持し存続する農家への耕地の集中、そして企業的大規模经营による生産性の高い農業が少数農家で営まれていくであろう。これは現状をふまえても望まれる姿であり、現在その動きは見られる。

都市化の農業への影響について論じてきたが、宅地化・工業化による耕地の壊廃といった直接的なインパクトは部分的に限定されており、むしろ農業の変容は、高度経済成長により日本全体にもたらされた生活水準の向上、都市的生活様式を志向する農民の意識の変化にその一番の原因を求められよう。